OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	Embracing Reality: Struggles of Self in the Plays of Tennessee Williams and Edward Albee
Author(s)	村上, 陽香
Citation	大阪大学, 2022, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/88121
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

様式３

論　文　内　容　の　要　旨

氏　名　（　村上　陽香　）	
論文題名	Embracing Reality: Struggles of Self in the Plays of Tennessee Williams and Edward Albee （現実を抱き締める――テネシー・ウィリアムズとエドワード・オールビーの劇に見る自己の葛藤）

論文内容の要旨

テネシー・ウィリアムズとエドワード・オールビーは、活躍した時期にこそ開きはあるものの、複数の共通項を持つ。まずは序章にて二人の幼少期の家庭環境について振り返る。いずれの作家の幼少期も、両親との関係に恵まれず幸せとは言い難いものだったが、その分、後に家族は二人にとってのミューズとなる。また、二人の共通点として同性愛者であることも挙げられる。このこともまた、二人を家族から疎遠にした要因の一つである。両親を信頼できないどころか、彼らに拒絶されることで、二人の作家は「自分とは何者か」という存在論的な問いに晒されただろう。本論文では、彼らが向き合い続けた現実というものとの関わり方について、時系列的に作品を分析することで考察する。本論文では現実とは、「変えられない環境の中での自己」と定義づける。また、題目にある「抱き締める」とは、単に受容するだけではなく、最終的に悩みぬいた自分自身と和解し、自己統一を図ることを意味する。「何者であるか」と「何者でありたいか」との大きな溝を描きながら、二人の作家が劇作と人生を通じて、どのように現実とむきあっていったか検証していく。

第一章では、ウィリアムズとオールビーの初期の成功作において、規範から逸脱しているとされている登場人物が、いかに現実から逃れ、幻想に縋ろうとしたかについて論じる。本章では、ウィリアムズの『欲望という名の電車』についてブランチの表す真の欲望の意味を、オールビーの『ヴァージニア・ウルフなんて怖くない』についてゲーム化されたフィクション作りの意味を分析した。『欲望』のブランチのほうが『ヴァージニア・ウルフ』のマーサとジョージに比べて悲惨な結末を迎えるが、これは子供のいない家庭（非理想的な家族の形）よりも性的な逸脱のほうが大衆から厳しい目で見られるからではないだろうか。いずれにせよ、本章で扱った両作品は、劇作家自身の生活における関心事に根付いており、現実と虚構の争いを描いたものであることが分かる。

第二章では、ウィリアムズとオールビーのキャリア中期に発表され、好評を得なかった作品を扱う。ウィリアムズの『二人芝居』ではメタシアターの概念を参照しながら、登場人物が戦略的に演劇空間に残ることを決断し、劇作行為を通じて生き残ろうとしたことを論じる。これはウィリアムズ自身の「泥酔時代」における劇作とパラレルの関係を成す。オールビーの『ダビュークから来た婦人』では、パラレル・ワールドの交錯地点として本作を分析し、現実の複数性、選択可能性について議論する。これはオールビー自身が現実を唯一のものとして捉えない考え方をしていたことと連動する。本章の二作品は、第一章の現実対虚構から、現実対代替現実の構図を取っている。

第三章では、まずウィリアムズの『曇ったもの、澄んだもの』におけるパレードの意味と美しい過去の結晶化を考える。その後、オールビーの『三人の背の高い女たち』を扱い、オールビーの養母であるフランシスの生涯を、時間的重層性を伴いながら描き出し、最後には喪失や絶望をも含めた彼女自身を彼女の「完全体」として映し出していることを示す。自伝的、あるいは伝記的である両作品は、二人の劇作家のキャリア後期に執筆されたものであり、内省的性格を持つ。彼らが年月や葛藤を経て、ついに現実と和解し、一つとなる姿が本章の二作から読み取れる。

本論文では、ウィリアムズとオールビーの劇作家人生を、作品を介して通時的に分析する。結論として、彼らが現実に対して理想的な虚構を描いた初期、現実を複数性のあるものとして扱った中期、そして全体性を持つものとして現実を受け入れた後期の作品という、各時期における作品の性質が見える。二人の劇作家は最終的にはありのままの現実、つまりはありのままの自己を受容し、自己統一に至ったが、これは彼らが最初からそうすることが可能な人物だったことを意味するわけではない。年月、葛藤、努力を経て、二人は少しずつ変貌を遂げ、人生の晩年においてついに現実を抱き締められる人物になったのである。

様式 7

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏　名　（　村上　陽香　）			
論文審査担当者	（職）		氏　名
	主 査	准教授	岡本　太助
	副 査	教授	渡邉　克昭
	副 査	教授	畑田　美緒
	副 査	教授	中村　未樹
	副 査	名誉教授	貴志　雅之

論文審査の結果の要旨

本論文、“Embracing Reality: Struggles of Self in the Plays of Tennessee Williams and Edward Albee”は、20世紀アメリカ演劇を代表する二人の劇作家テネシー・ウィリアムズとエドワード・オールビーを比較検討し、具体的な作品精読を通じて、劇中の登場人物が彼らを取り巻く環境である「現実」とどう向き合うのかを明らかにしたうえで、それを敷衍して、二人の劇作家が自らの人生と創作においてそれぞれの「現実」と相対し、その受け入れがたい「現実」といかにして折り合いをつけたのかを通時的に分析する試みである。伝記あるいは自伝的要素に着目しつつも、あくまで作品論としてこれらの作家を比較検討した研究には類例がなく、論文のテーマ設定の独創性は高く評価できる。また、論文において「現実」を「変えられない環境の中での自己」と定義し、それに対する登場人物や作家の葛藤を、自分が「何者であるか」と「何者でありたいか」との間のギャップゆえに引き起こされる、アイデンティティをめぐる問いとして捉える視点にもオリジナリティがある。さらに、章ごとに作家の活動における初期・低迷期・後期と時期を区切り、それぞれの章で各作家の作品一つを選び論じるという構成により、これらの作家の創作活動において、（１）「現実から虚構へ逃避する」、（２）「現実と対立する代替現実を創出する」、（３）「現実そのものを受け入れる」というように、現実との向き合い方が変化していった過程を明確に示すことに成功している。

「初期の成功作における現実と幻想」と題する第１章では、ウィリアムズの『欲望という名の電車』（1947）とオールビーの『ヴァージニア・ウルフなんて怖くない』（1962）という初期の代表作を取り上げ、社会的規範から逸脱する者とみなされる登場人物が、現実から逃避し幻想や虚構にすがる様をつぶさに分析している。両作品の

結末は大きく異なるが、これらの作品の比較からは、二人の劇作家が、虚構を「現実を侵すもの」と捉える点で認識を同じくしていたことが明らかにされる。第１章第１節では、『欲望という名の電車』の主人公ブランチにとって、今は亡き夫のアランとの再会が死後の世界における楽園であるという点に着目し、結末でブランチがそうした魔法と死の世界に飲み込まれてしまうことを、異性愛者である彼女が同性愛者であるアランに対して抱く欲望を肯定的に受け入れたものとする解釈を提示している。第１章第２節では、『ヴァージニア・ウルフなんて怖くない』で中年夫婦がゲストや観客を巻き込みながら興じる一連のゲームが、どちらがよりよい虚構を作り出せるかを競うものであることを確認したうえで、結末の悪霊祓いにおける架空の息子の殺害により、彼らが現実から我が身を守るための虚構なしに現実と向き合うことになると論じている。

第２章「失敗の中で」では、キャリア中期の「失敗作」とされるウィリアムズ『二人芝居』（1975）とオールビー『ダビュークから来た婦人』（1980）を取り上げ、評価を得られない状況で創作を続けた両作家の苦悩が作品にも反映されていると仮定し、メタ的な構造を持つこれらの作品からは、二人の作家が自身を取り巻く現実を「複数性」を持つものとして捉えるようになったことが窺えると指摘している。第２章第１節では、劇場に閉じ込められたまま同じタイトルの劇中劇を上演し続ける兄妹を描く『二人芝居』に関して、「lost」という語の持つ二重の意味に着目し、彼らが劇の虚構の中で自分を見失う（lost）のではなく、劇中で演じる即興劇に没頭する（lost）ことで、耐えがたい現実に対抗する代替現実を作り出し、それによって生き残りを図っていると論じる。第２章第２節では、『ダビュークから来た婦人』の第一幕を一つの現実とみなし、そこに侵入してくるエリザベスとオスカーが表象するパラレルワールドが、同作の第二幕におけるもう一つの現実を構成していると仮定する。過去の作品では現実に対する虚構として提示されていたものが、あり得たかもしれない別の現実として提示される点には、これらの作家の後期における方向性の萌芽を見て取ることができると指摘している。

第３章「全てがついに終わるとき」は、ウィリアムズ『曇ったもの、澄んだもの』（1981）とオールビー『三人の背の高い女たち』（1991）という後期作品を取り上げ、作家の自伝的要素の強いこれらの作品で時間が非直線的なものとして提示されている点に着目し、別の時代における複数の現実が同時共存可能なものとみなされてい

ることを指摘し、そこに受け入れがたい現実と折り合いをつけることに成功した両作家の境地を読み取るものである。第３章第１節では、『曇ったもの、澄んだもの』における「パレードを待ちわびる」、「曇ったもの、澄んだもの」としての左右の眼といったイメージの象徴性に着目し、過去と現在それぞれにおける現実が固定されたものではなく「自由浮動的」に混ざり合うものとして描かれている点などから、この劇は作家が自身の同性愛的欲望を肯定的に回顧するものとなっていると論じている。第３章第２節では、オールビーが亡くなった養母について書いた『三人の背の高い女たち』の特殊な設定を手掛かりに、養母の伝記的な完全性を損なうかのようにみえるこの劇では、実は養母自身に自らの死を舞台上において演じるうえでの主導権が与えられていると結論づける。これらの後期作品では、これらの作家が、罪悪感や敵意といった負の感情も含めた自身の人生における「現実」を受け入れるにいたったことが示されているとの解釈を提示し、そこから、彼らが長い苦悩の末に「現実「そのもの」と向き合い、抱き締める」ようになった、という本論文全体の結論を導いている。

審査委員からは、「現実」やそれを「抱き締める」という概念の定義づけが曖昧であり理論的裏付けを欠いている、この二人の作家を選んだ理由が恣意的である、各論はよくまとまっているがいずれも結論が予定調和となっている感は否めない、作品論を標榜するわりには重要なディテールが十分論じられていない、文化・社会・政治といったハードな現実に対して演劇の創作が何をなし得るかを論じるべきである、さらに『ダビュークから来た婦人』論におけるパラレルワールド概念導入の妥当性については再検討すべきである、といったコメントがなされたが、全体としては論の運びが丁寧で、文章表現も水準が高く議論を的確に伝えきれており、アメリカ演劇および個別の作家研究の新たな可能性を指し示している点でも、今後のさらなる発展が期待できる。自身の立論の問題点を客観的に把握し、それと真摯に向きあい議論を進めていく姿勢および斬新な切り口を発見する能力の高さからは、執筆者がアメリカ演劇研究に関して抱く問題意識と研究者としての資質が窺える。

上記考査に基づき、論文の内容、文章表現、研究上の意義等を総合的に判定した結果、本審査委員会は全会一致で、本論文が博士（言語文化学）の学位を授与するにふさわしい論文であるとの結論に達した。